

# ひとりひとりを見つめて



近藤 義 光

「先生。K君が特選に入ったよ。」放課後、事務をとっていたわたしは、思わず腰をあげ、教室に入って来た女の子たちに向かって、「ほんとか。」

と大きな声で聞きかえした。「ほんとよ。よかったね。」  
「K君のはうまかったもの。」  
「うん。K君。たいしたもんだな。」わたしも感嘆の声を出してしまっただけだ。これは、二月の校内版画展の時のことである。展示のあと、図工部の先生がたが審査をすることになっていた。審査の結果、K君の作品が特選に選ばれたのである。

K君は学力のおくれている子で、言語動作がはきはきせず、授業中もじつと黙っているいわゆる学級の問題児で

ある。そのK君が特選になった。これは本人はもちろん同級生にとつても、前代未聞のできごとなのである。

K君にとつて学校から賞状をもらったのは、これが初めてである。

わたしは、K君の版画がたぶんえらばれるのであろうと予想しないわけではなかった。というのは、前日の図工の時間に全部の子が「刷り」を終わり、作品を提出しているのに、K君だけがまだ「彫り」が終わっていないかったのである。普通なら半端でやめてしまうK君が、このとき、

「先生、放課後残ってやっていいかい。」と申し出たのであった。放課後のK君はそれは夢中で黙々とほっていたのだ。わたしは作品を見て、その構図の大胆さと彫りのこまやかさにおどろい

たからである。

何の勉強をやつても理解の遅いK、運動をやつても人にすぐれるものを持たないK、友達とも多くしゃべらないK、そのKがこのように根気強く、このように器用に彫刻刀を動かしている。わたしは、こんなKの姿を見つめながら、自分の教師としての観察の甘さや指導のいたらなさを、反省しないわけにはいられなかった。

「子供のひとりひとりをたいせつにする授業」  
「ひとりひとりの子供を生かす指導」  
などと大上段にかまえて、子供の欠陥やつまづきや劣っている面ばかりに目を向け、その治療や追指導にばかり気をとられていなかったか、あの子ができる子あの子はできない子



ひとりひとりの子を見つめて

ときめつけていなかったか。K君を棒にもはしにもかからない子と見ていなかったか、子供の見方、評価のしかたが固定的でなかったか、いまさらのようにならざるべきところである。

三年生になつてもかけ算九九をまちがえていたA男は、ある日算数の考え方がすばらしいとほめられたのがきっかけで算数がすきになり、ぐんぐんと勉強するようになって、中学校では、二番の成績で卒業した事例を知っている。A男をほめ、算数をすきにさせたB子先生のすばらしさに敬服すると同時に、教育の力の偉大さを痛感する。

どんな子にもかくれた才能がある。才能とまで言われないとしても、個性あるいはすぐれた点がある。これを能力と見るなら、どんな子にも何らかの能力がある。ただ子供自身そしてわたし自身がそれを見つけて出せないでいるのだと思う。子供には可能性が秘められているのだ。この可能性をたいせつにしたいと思う。そのことがひとりひとりの子供をいきいきと活動させることにつながる、自信と希望をもたせることになるのだろう。

K君は校内文集「かたつむり」にも詩を書いてえらばれた。わたしは頭をなでてやつたら、にこっと笑った。

これからは、もつとひとりひとりの子供をたいせつに見つめていきたい。

(石川町立浅川小学校教諭)